

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会  
に向けた科学技術イノベーションの取組に関する  
タスクフォース（第3回）

平成27年2月2日（月）

## 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた 科学技術イノベーションの取組に関するタスクフォース（第3回）

1. 日 時 平成27年2月2日（月）17：15～18：45

2. 場 所 中央合同庁舎8号館6階623会議室

3. 出席者：（敬称略）

山口 俊一 内閣府特命担当大臣（科学技術政策担当）

松本 洋平 内閣府大臣政務官

秋山 俊行 東京都副知事

（構成員）伊藤 智也、齋藤 ウィリアム 浩幸、竹内 薫、為末 大、  
パトリック ハーラン

（オブザーバー）中嶋 正宏、布村 幸彦、平田 竹男

（総合科学技術・イノベーション会議）久間 和生、小谷 元子

（事務局）森本 浩一 内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション）、

山岸 秀之 内閣府大臣官房審議官、

中川 健朗 内閣府大臣官房審議官、

田中 宏 内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション）付参事官

真先 正人 内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション）付参事官

4. 議 事

1. 開会

2. 議題

（1）大会に向けた科学技術イノベーションの取組に関する基本理念等について

（2）各プロジェクトの実施計画書（案）について

（3）大会開催基本計画（案）の概要について

（4）その他

5. 配布資料

資料1 : 大会に向けた科学技術イノベーションの取組に関する基本理念等について

資料2 - 1 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 2 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 3 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 4 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 5 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 6 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 7 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 8 : プロジェクト 説明資料

資料2 - 9 : プロジェクト 説明資料

資料3 : 大会開催基本計画書（案）の概要について

参考資料1：野口構成員からのご意見

参考資料2：2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた科学技術イノベーションの取組に関するタスクフォースの開催について

参考資料3：第2回タスクフォースで頂いたご意見等への対応について

参考資料4：第2回タスクフォース議事録

## 6．議事

### 【事務局（森本統括官）】

本日は大変お忙しい中御出席いただきまして、ありがとうございます。政策統括官の森本でございます。よろしくお願いいたします。

ただいまから、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた科学技術イノベーションの取組に関するタスクフォースの第3回目の会合を開催いたします。

まず始めに山口大臣より、御挨拶をいただきます。

### 【山口大臣】

今日は大変お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。

昨年の8月からこのタスクフォースをスタートしたところでございますが、その取組について、これまでメンバーの皆様方より御指導・御助言をいただき進めてまいりました。また、これまで各府省、東京都、大会組織委員会のほか、多くの方々の御協力の下で検討を進めていただいておりますことに、改めて御礼を申し上げたいと思います。

とりわけこの年末年始、各報道で大会での新しい科学技術の実現に関する特集等が多く組まれておりまして、大会に向けた世の中の関心も大いに高まってきていると感じました。

大会を通して最先端の科学技術を実現し、世界に発信をしていくということは、まさに生活や産業等のあらゆる面で世界の潮流を変え、かつ、持続可能な地球の未来に貢献をし、世界をリードしていくまたとないきっかけになるものと考えております。まさに日本の未来をかけた絶好のチャンスであり、そのスタートラインに立ったところかと思っております。あと5年と限られた時間の中でこの取組を最大限に進めていくためには、各機関のほか民間企業等にも御参加をいただきまして、オールジャパンで取組を進めていくということが必要でございます。そのためには、取組を分かりやすく発信し訴求をすることで、実現に向けた機運を更に盛り上げていくことも必要かと思っております。

また大会後の社会への貢献はもとより、成果を全国に展開をしていくことによって、地方も

一緒にその成果を享受していくことも重要と考えております。これらの視点をもって基本理念や各プロジェクトの取組について更に検討を深めていただいているところでございます。メンバーの皆様方にもその視点で本日も御助言をいただくほか、引き続き取組への御協力を賜りたいとお願いをする次第でございます。

なお、先般安倍総理と話をしていたところ、総理もこのタスクフォースに大変興味を持っておられまして、できれば総合科学技術・イノベーション会議で何かデモをやってほしいとのお話もございました。何とぞ、皆様方にはよろしくお願いをする次第でございます。

以上でございます。

#### 【事務局（森本統括官）】

どうもありがとうございました。

続きまして松本政務官に御挨拶をいただきます。

#### 【松本政務官】

ただいま御紹介をいただきました内閣府大臣政務官の松本洋平でございます。

このタスクフォースは構成員の皆様のほか、各府省、東京都、大会組織委員会等、さまざまな御協力の下で進められているところでありまして、これまでの皆様方の御尽力に心から敬意を申し上げたいと思います。

私自身、実は学生時代、中学校1年生から大学4年生まで陸上競技をやっておりまして、今はこの体でありますから砲丸投げの選手をやっていたのかと言われることが多いのですが、実は為末さんと同じ400メートルをずっとやっておりまして、中学、高校、大学時代に全日中、インターハイ、インカレに出場させていただきました。また、私は地元の選挙区が東京ということもありまして、この2020年東京大会にはただならぬ思いを持たせていただいているところでもあります。

これまで検討してきているプロジェクトには、エネルギーや環境、高齢化、防災等、大会の成功だけではなくて、現代の日本や世界が抱えている問題を解決する希望が詰まった魅力的な取組が挙げられているところでもあります。まさにものづくり大国、科学技術大国日本を象徴する試みでもあると思っております。この大会を通じて、これらの取組を実現していただき、発信することで、日本の底力を世界に示していけるよう、引き続き皆様方の御尽力をお願いいたします。私からの御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局（森本統括官）】

どうもありがとうございました。

続きまして東京都の秋山副知事より御挨拶をいただきたいと思います。

【秋山副知事（東京都）】

御紹介いただきました東京都副知事の秋山でございます。本タスクフォースにて御挨拶の機会をいただきますこと、大変光栄でございます。また構成員の皆様方には、2020年東京大会に向けました東京都の取組に關しまして、日頃から多大なる御支援、御協力をいただいておりますこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

一昨年9月に2020年東京大会招致が決定いたしまして、東京都はこの1年余りの間、開催に向けまして大会組織委員会をはじめ、JOC、JPC等関係機関の皆様の御協力をいただきまして、全力を挙げて準備に邁進をしております。大会開催まで残された時間はあと5年と少しとなりましたけれども、これまで以上に関係機関の皆様と連携を図って、共に準備に万全を期していきたいと思っております。

知事の舛添も日頃から、2020年は終着点ではなく、その先も東京が、そして日本全体が発展していくための通過点である、と常々発言をさせていただいているところでございます。東京都では、大会開催後の東京の将来像を形づくる有形無形のレガシーを検討するため、昨年11月に知事をトップといたしますレガシー委員会を庁内に設置するということを含めて、取組を加速させているところでございます。このタスクフォースで検討している様々な科学技術につきましても、2020年大会を契機に次世代に承継され、都民、国民の生活を向上させ、東京のみならず我が国全体の発展につながる、2020年大会のレガシーとなるよう、東京都としてもしっかり取り組んでいきたいと思っております。

また2020年東京大会は、我が国の優れた科学技術を世界に向けて発信していく絶好の機会になるとも考えております。水素社会の実現に向けて、東京都では、水素エネルギーの戦略等を「水素社会の実現に向けた東京戦略会議」にて検討を進め、昨年11月に「中間まとめ」を発表させていただきました。この「中間まとめ」では競技会場への輸送、選手村等において水素エネルギーを活用していくことを打ち出しております。また水素のみならず、競技施設への最新の省エネ施設の導入や、都心と臨海部を結ぶBRTへの新技術の活用等、大会運営の場面で科学技術を駆使し、すばらしい大会を開催していきたいと考えております。タスクフォースの構成員の皆様方におかれましても、引き続き、東京都への御支援をこの場をお借りしてお願い申

し上げまして、挨拶と代えさせていただきます。

なお、日程の都合でこの後退席させていただきますが、東京都の所管局長の中嶋が残っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

ありがとうございました。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

続きまして出席者の皆様を御紹介します。

【事務局（山岸審議官）】

お手元の議事次第の3ページ目に出席者一覧がございます。

本日は、前回所用で御参加いただけなかったタレントのパトリック ハーラン様に御出席いただいております。

また、前回に引き続きまして、元パラリンピック陸上代表選手の伊藤智也様、株式会社インターカー代表の齋藤ウィリアム浩幸様、サイエンス作家の竹内薫様、元オリンピック陸上代表選手の為末大様に御出席いただいております。

なお、株式会社テレビ東京チーフプロデューサーの野口雄史様におかれましては、御欠席との連絡をいただいております。

また、オブザーバーの皆様及び総合科学技術・イノベーション会議議員につきましても、出席者の一覧のとおり御参加いただいております。

以上です。

【事務局（森本統括官）】

それでは、これから議題に入りたいと思います。

初めに議題（1）「大会に向けた科学技術イノベーションの取組に関する基本理念等」について議論したいと思います。

先ほども大臣からお話がありまして、今後は各プロジェクトの取組を分かりやすく発信し、民間企業等も巻き込んだオールジャパンでの取組が必要となると考えております。その視点を踏まえまして、前回御説明した基本理念や発信方法を整理してまいりましたので、事務局から説明させていただきます。

## 【事務局】

では、お手元、資料1と資料1別添をもとに御説明させていただきます。

このタスクフォースの検討事項は「1. 基本的理念」、「2. 実施プロジェクトへの助言」、「3. これらをどのように発信していくか」の3点でございます。このうち2点目の詳細については議題2で議論することとし、ここでは1点目「基本的理念」と3点目「発信の考え方に至る流れ」について資料1を用いて説明させていただきます。

資料1の2ページ目に記載している「プロローグ」について、これまでのタスクフォースにて、基本理念の構築に向けたご意見として、構成員の皆様方より「オールジャパンによる科学技術の成果を活かした地域経済への貢献」、「交流が図れる場の提供」、「高齢者・障害者が快適に暮らせるユニバーサルシティの構築」等のご意見をいただきました。これらの意見を踏まえて基本的理念を導くプロローグをまとめ、「1964年大会は日本を変えた。2020年大会は世界を変える。」との基本理念に誘導しています。

3ページ目について、これは前回タスクフォースで議論された内容ですが、基本理念を「科学技術イノベーションで世界を大きく前進させる。」としております。そして、この理念を達成するための手段としまして、広く世界に向けた発信を行うため、ソーシャルインパクトを与えるものを選び、選手、観客の安全・快適の実現を行う、大会ホスピタリティによりこれを実証する、そしてシェアードバリューとして地域社会システム整備に反映させ、日本や世界で価値競争をしていく、という3つの手段で取り組むことを挙げております。この達成に向けた基本的な取組として、「快適」「環境」「安全」という3つの柱のもと、次のページに示す科学技術イノベーションで世界を大きく前進させる9つのプロジェクトを実行していくという流れとしています。

今後、これらの取組を社会に訴求していくことが大変重要と考えておりまして、ここには訴求するための手法として、9つのプロジェクトごとに一つずつコンセプトワードを置かせていただいております。

また、次のページですが、それぞれのプロジェクトを訴求する上でのポイント、主要技術を整理してまいりました。

6ページについて、今後これらのプロジェクトを国民の皆様にご理解いただき応援していただくこと、また民間企業や研究機関等に幅広く参画いただき事業の具現化を目指すため、各プロジェクトの取組を訴求材料として、これらの資料とともに議題2では実施計画書というのを提示してまいりたいと思います。これら9つのプロジェクトの全てにそれぞれコンセプトワ

ードを設定させていただいておりますが、さらに、目指す世界観等、社会全体に訴求し、より多くのステークホルダーを巻き込むために全体を束ねる、より分かりやすく、覚えやすく、共感をうながす文脈に変換する言葉と文章が極めて有効であると考え、キャッチコピーやスローガンとなるような言葉と解説文が必要と考えております。

これについて、資料1の別添に記載の通り、3つの案を事務局にて用意しております。

別添の1ページ目について、訴求力を高める言葉として、どの方向性に軸足を置くかを示す3つの案を示しております。具体的には2ページ目をお開きください。案の1として、技術を統合したマスターコンセプト型として、架空のイノベーションではなく、2020年に実現され、人々の生活をよりよいものにしていく技術であることに軸足を置いたものとして、「Realizing Innovation 2020」。次が3ページ目、案の2ですが、一般国民が技術を享受するベネフィット目線型として、誰に向けられた技術なのかという立ち位置を明確にし、民意の賛同と注目を集めていくことに軸足を置いたものとして「Innovation for All 2020」。そして案の3として、4ページ目でございますけれども、技術を活用することで目指す社会像に基づいたものとして、新たな生活形態を実現していくための技術であるということに軸足を置いたものとして「New Lifestyle Project 2020」と提案させていただいております。解説する文章は全て同じ内容です。この他にも世界への発信力、訴求力を高める言葉がありましたらご提案いただき、この場で定めていただきたいと思いますと考えております。

最後に、資料の7ページ目に記載する今後の発信の基本的な考え方と、8ページ目のロードマップについて説明させていただきます。

まず、「国内の情報発信」を先行させる必要があると考えておまして、メディア等への情報発信を定期的に行い、認知度アップや話題性の喚起を図り、プロジェクトを民間企業に働きかけ、研究開発や大会での活用を促進するというを行うとともに、2番目に「体験の場づくり」として、会場隣接の日本科学未来館や全国の科学館、さまざまな人が集まり楽しむ場を活用、連携して、体験や情報収集を通じて理解を深める場や機会づくりを促進していきたいと考えております。そして、プロジェクトの実施内容がある程度詰まってからという時間軸になると思いますが、「海外への情報発信」として国際会議や海外展示会等の機会を活用し、海外へのPRの促進や、大会を通じて来訪者・諸外国に対するPRを最大化を図っていくことを検討しております。

これらをマスタープランとして、更に今後、具体化を図っていききたいと考えております。

以上です。



【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

ただいまの内容につきまして、構成員の皆様からご意見等いただきたいと思います。

最初に、本日御欠席の野口構成員からコメントをあらかじめいただいておりますので、それを御紹介させていただければと思います。

【事務局】

では参考資料1を御覧ください。野口構成員から事前に次のようなご意見をいただいております。

「発信方法について、せっかくさまざまな最新技術やアイデアを用意するのであるならば、それらを皆さんに知ってもらい、実際に利用してもらわなければならない。何が最新の技術なのか、どこでそれを体験できるのか、さらには、気象情報や交通手段、道や会場の混雑状況等、観戦に来た人にとって便利な情報を全て網羅したアプリをつくり、羽田空港や成田空港でダウンロードできるようにしてはどうか。簡単な冊子を用意するのもよい方法かもしれない」

これは今回、各プロジェクトの表紙等をビジュアル的に趣向を凝らしたこともこの一環と考えております。また、次の議題にはなりますけれども、発信方法にも関係するということであわせて紹介させていただくと、プロジェクトの9で花づくりプロジェクトについて、

「最近では日本の木材でつくった木工品や木造家屋も再評価され始めていると。日本は国土の7割が森林という森林大国。日本の木材のすばらしさ、日本の木を愛する文化を世界の人たちに伝える場もあってもいいのではないか」

という意見もいただいております。以上です。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

この件については色々な視点があるかと思いますが、その9つのプロジェクト全体を包含するキャッチフレーズといたしますか、その理念といたしますか、そういった観点でご意見をいただければと思います。どなたからでも結構でございます。

【為末構成員】

この三つのワード以外でも大丈夫ですか。

実際に国民の側から見たときに、すごい技術であるかどうかということよりも、どれだけ自分たちの生活に役が立つとか、そういった視点が強いのではないかかと思うので、アイデアですが、例えば小さな選手村みたいなものを1、2年前に作り、それが未来の生活スタイルだというもので、取組のコンセプトをまとめ、そこに自分たちが使ったエネルギーや、実際にそこで生み出した自然エネルギーなどを可視化できたり、若しくは、車椅子の方と健常者の方が住んでいても全く違和感ないような家づくりを表現したり、何となくその未来のコンセプトが実現されたひとつの形があるといいなと思いました。

言葉としてのアイデアは、どうしても科学技術というと、何となく人間の感覚がないので、体温がある科学技術というか、人間らしい科学技術というのが、実際に使う側にとっては一番重要なような気がするので、逆にその科学技術に温かさみたいなものをくっつけると、どうしても科学技術は、何か自分たちからコミュニケーションを奪ってしまうのではないかというイメージもあると思いますけれども、それを逆に、むしろ人の温かさを加速するようなものなんだというコンセプトを打ち出せると、理解が深まるのではないかと思います。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。他にいかがでございましょうか。

【竹内構成員】

これは今ここで、3つのコンセプトのどれを選ぶかをまず大きく決めて、それがその文言に入っていくという理解でよろしいのでしょうか。

【事務局（森本統括官）】

はい、もしこの皆さんのご意見が集約できれば、そのようにしていければと思っております。

【竹内構成員】

一般の国民の方が何を享受できるかっていうところは重要だと思いますね。確かにおっしゃるとおりで、科学技術だけが一人歩きすると何かこう冷たい感じがあると思います。そういう意味では、この2番目のものというのは割合受け入れやすいかなという気がします。

あと、文言のことについては、英語になりますので、今日はネイティブの方がおふたりいらっしゃるので、最後の詰めはやはりお任せしてはどうかという感じがしました。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

これは国内発信のみならず国際的な発信が必要だということですね。

【ハーラン構成員】

ただいま受けた意見、ありがたく賜りたいと思いますが、ネイティブがこの会場には二人だけなのですか？ということで、世界の人口70億人で35億人ずつを代表するようなものだと思うんですけど。ぜひ方向を決めていただければ、最後に英語のかっこいい何か一つ二つを提案させていただきたいと思います。

個人的な意見としては案2の「Innovation for All」のように、母音の音が連発で来る言い方が、この中では一番かっこいいなと思います。あと、日本はイノベーション大国という意味で、「Innovation Nation Japan」という韻を踏んだような言い方だと、耳に残って世界的にすぐ広まりそうな気がします。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

齋藤構成員、お願いします。

【齋藤構成員】

一つ一つの案を見ていきますと、その「Realizing Innovation」というのはこれからイノベーションができるかできないかというところで、何か保険をかけているような印象を受けます。三つ目の「Lifestyle Project」は、イノベーションという言葉が消えてしまって、今度は逆にゆるいかなという気がしますね。

Innovation Japanも良いのですが、これは海外に発信して、それを達成できなかつたら恥をかくんじゃないかという気もする。さっき説明にもあったように、1964年は「for Japan」のイノベーションだったのに対して、2020年は「for the world」ということになると、「Innovation for All」というよりはもう少しはっきりと、さっきの理念じゃないですが「Innovation for the world」とするのが良いと思う。イノベーションは今、定義が少し狭いところがあるのかなと思って、イノベーションという言葉を手短かに説明する機会にできればいいと思います。イノベーションは、もちろん科学技術という印象が強いのですが、デザインと

かアート、思想とか、そういうものも入ってくる概念なので、それを説明できるチャンスになればいいと思います。技術者や科学者しか参加できないのではなくて、デザイナー系、芸術家、すべての人が関われるものとして、定義を広げられたらいいと思います。

1964年の東京オリンピックのイノベーションといえば、やはり新幹線ですよ。新幹線は確かに科学技術もすごいですけれども、皆さんのライフスタイルにも影響を及ぼしている。そういうイノベーションが一つの基準であり、何とかワーディングしてコンセプトに盛り込みたい。そういう意味から、Innovation、そして、for the Worldというのを提案したいと思います。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

【ハーラン構成員】

もうひとつよろしいですか。Realizingを使いたいとか、同じような意味で似ている単語であれば「Realizing Innovation」は確かに今御指摘のとおり、ちょっと英語的にはピンと来ない表現なんですけど、「Real Life Innovation」だったらいけるかなと思います。「リアルライフ＝実際のその生活上のイノベーションを実現した感じもしますし、生活に密着したようなイノベーションにもつながるかなと思います。

以上です。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

【齋藤構成員】

確かに、リアルライフのほうが良いと思います。「Style」と言うと、やりたい人とやりたくない人、選択の意味合いが入ってきてしまうんですよ。リアルライフだとすべての人に関係するという意味で、はっきりすると思います。

【事務局（森本統括官）】

「Real Life Innovation」という案が出ました。

伊藤構成員、もしよろしければ、何かございますでしょうか。

【伊藤構成員】

私も、「for All」という言葉は大好きなのですが、私の表現がどのような英語に英訳されるか分かりませんが、やっぱりこの国が一番遅れているのは「多様性」という部分を鑑みたときに、もう少しぬくもりのあるような、全てを網羅したような短い言葉でキャッチフレーズをつくるのであれば、色々考えた結果、やっぱりInnovation for Allになるのかなと思い、この案が一番賛成です。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

【ハーラン構成員】

よろしいですか。

為末さんと二人で話し合っていたのですが、他に単語として、earthとかhumanとかpersonalなど、いろんな単語にいろんなぬくもりや意味合いがあって、その組合せによってやっぱり大きく印象が変わると思うんですが、一つ、テーマを決めて、その下の説明文とか、各プロジェクトのタイトルにそういう、ちょっと細かいニュアンスの単語をいくつかちりばめておけばいいかなと思います。

【齋藤構成員】

英語で聞くと、「All」というのは対象が漠然としてしまう感じがしますね。多様であるというニュアンスを含ませる工夫をするならば「All」を「Everyone」に変えると、雰囲気が変わってきます。

【事務局（森本統括官）】

「Innovation for Everyone」。

これはなかなかいろんな方の趣味とかそういうことにもよるかもしれませんが、ただコンセプトとしてはできるだけ多くの世界の人を視野に入れて、その人たちに向けてこの大会をうまく活用していくと、こういうことについては皆さん大体一致しているのかなという感じがします。この文章の中にもどのように入れられるかを考えなければいけないかなと思っております。

そうすると、「Innovation for the World」、「Innovation for Everyone」、「Real Life

Innovation」。

【ハーラン構成員】

どんどん付け足して、「Real Life Innovation for Everyone in the World」という可能性もあるわけですね。

【竹内構成員】

ちょっと言い換えを考えていただきたいのですが、「Innovation for the rest of us」という感じですね、つまり、ちょっと高みのあるものじゃなくみんなで享受できるようなものという意味があると思うのですが、それを言い換えして何かもっと良い言い方がないかと思っています。

【ハーラン構成員】

「Innovation for the rest of us」というと逆にちょっと排他的なニュアンスがありますね。今までのイノベーションは誰のためだったのかという感じもします。

これは方向性を決めていただき、後で少人数でやったほうが良いと思います。

【事務局（森本統括官）】

おっしゃるとおりでございます、それぞれニュアンスが違います。この場ですぐに決めるのも難しいところもあるかと思いますが、皆さんから色々ご意見を伺った中で、大臣あるいは政務官より何かコメント等ございましたらお願いします。

【山口大臣】

色々なご提案を楽しく聞かせていただきました。イメージとして、最初の3案から選ぶというのは非常に難しいという気がします。最初は英語で表現するのもどうかと感じましたが、確かに世界に広げていくという意味では良いのかもしれません。私としては個人的に2番目の案である「Innovation for All 2020」が良いと思います。昔の野球漫画で「One for ALL、ALL for One」という言葉が使われていたのを思い出しました。これは一時期流行りましたね。そのような案も結構おもしろいかと思います。

皆さんから色々頂いたご提案はサブタイトルのようなところでちりばめても良いのではな

いかと思いました。

【ハーラン構成員】

この案の中では僕も多分2番目が一番いいのかなと思います。

【為末構成員】

何となく「選択する未来」のような感じで、こういう科学技術が今後出てくる可能性あるけど、どういう使い道がいいのかというものの、何かモデルの提示みたいになればいいなと思います。日本から発信するのであれば、ヒューマンロボットのような取組も多い国ですし、何か人間らしさとか、人間との融合をどのようにしていくかというアイデアを入れていくという意味では「Innovation for All」が多分一番近いと思いますが、そのような感じのイメージが文言の中に入ってくるといいかなと思いました。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございます。

この2番目の案に賛同する意見が多いような感じを受けております。おそらくこういうキャッチコピーというのは短いほうが良いと思いますし、そのほうがインパクトがあると思います。その意味するところを少し補足的にこの説明の中に入れ込んでいくという形で皆様のご意見を反映できるよう工夫させていただきたいと思います。この場ではとりあえず案の2を第一候補として考えさせていただき、最終的には大臣と御相談の上、決めさせていただきたいと思います。

【山口大臣】

ハーランさんからの韻を踏む「Innovation Nation Japan」の提案もなかなか捨てがたいと思います。

【ハーラン構成員】

それは多分×に用いると良いのではないかと思います。「今回、主催国Innovation Nation Japanが贈ります・・・」というような流れで。

【事務局（森本統括官）】

闊達なご意見ありがとうございました。皆さんの豊富な語彙力と表現力を、この場で享受できたと思います。この議論はこの辺で一端区切らせていただきます。

続きまして、それぞれのプロジェクトの実施計画書の案について議論させていただきたいと思います。前回のタスクフォースでは、各プロジェクトの取組内容を説明させていただきました。参考資料3に、これまで頂いたご意見を整理して表にまとめさせて頂いております。これをベースに関係省庁間でそれぞれのプロジェクトごとに意見交換を重ねて、検討を進めてまいりました。それで、さまざまなアイデア、御提案をできる限り取り入れて、実施計画書の中に反映するという努力をしてまいりました。

今回は、今後、民間企業等にお声がけをして、このプロジェクトの推進を具体的にやっていくということが必要になりますので、その取組概要、展開シーンのイメージ化、あるいは工程表や役割分担等について、各プロジェクトの主担当の省庁から説明させていただきたいと思います。

大変恐縮でございますが、1つのプロジェクトあたり2分をお願いします。まずプロジェクト1について主担当の総務省からお願い申し上げます。

【総務省】

総務省でございます。

それでは資料2 - 1で説明させていただきます。プロジェクト1は「海外からの来訪者等に多様なサービスを提供するための意志・情報伝達サポートの実現」ということで、総務省で取りまとめ役をさせていただいております。

2ページ目の取組概要を御覧いただきたいと思います。大きな目的といたしまして観光立国を推進し、国内経済の活性化につなげていくという社会課題、それから長期ビジョンといたしまして、言葉や文化の違いによるストレスを感じずに快適に日本で滞在できるようにする。それから、オリンピック・パラリンピック東京大会での役割といたしまして、会話に伴うストレスを軽減し、もっと楽しめるようにする。さらに、これを実現するために三つの手段といたしまして にございますように新たなグローバル都市像の発信、それから にございますように、全ての来訪者に同じ品質のおもてなしやサービスを提供できる。それから といたしまして訪日外国人観光客のさらなる獲得につなげていくということを挙げさせていただいております。こういったことを2020年に向けたコンセプト、一番下でございますけど、スマートホスピタリティとして、言葉としてまとめていただいているところでございます。



3 ページ目、展開イメージを御覧いただきたいと思います。この展開イメージの図に関しましては、4 ページから 6 ページにこのプロジェクトを構成する主要な技術が、多言語音声翻訳を始めとして主要な技術を挙げさせていただいておりますが、それらを組み合わせてどのようなサービスができるかというのを具体的に絵にしたものでございます。ここでは国際空港での場面、それから街中での場面、それから競技観戦中の場面、それから地方観光で利用しているシーン、こういった形でまとめさせていただいているところでございます。

飛ばしまして 7 ページ目を御覧いただきたいと思います。

こういったことを実現していくために必要な取組といたしまして、規制制度の関係では個人情報情報の取扱いに関することと、ロボットの安全性の確保、評価の指針といったものの検討が必要になってくると考えております。

8 ページを御覧いただきますと役割分担、事業主体ということで一覧にしてまとめてございます。さらに、9 ページ目の工程表でございます。主要な技術がいくつか挙げておりますが、これらを 2018 年からは一体的に実証実験ができるように取り組んでまいりたいと考えております。

説明は以上でございます。

#### 【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

それでは次にプロジェクト 2 について厚生労働省よりお願いいたします。

#### 【厚生労働省】

資料の 2 - 2 を御覧ください。一枚おめくりいただいて、1 ページ目のところ、世界各国から多くの人が入り込むことで懸念される感染症流行を迅速に探知するための感染症サーベイランスの強化というところでございます。これは、基本的取組の三つの柱、快適、環境、安全の安全というものに該当するプロジェクトでございます。

2 ページ目、御覧ください。エボラ出血熱やデング熱等、短期間で世界中のあらゆる場所に広がりうる状況となっている、このような現状につきまして、長期ビジョンとしてさまざまな感染症の脅威から人々の安全を確保した社会を実現するとしております。東京大会での役割としては、感染症サーベイランスの徹底と強化により、大規模イベント開催時における感染症等の異常発生を早期探知と迅速な対応を行うということでございます。三つの手段、大会前から

の万全な体制を組むこと、そしてPRすること、二つ目、流行前からの事前情報や発生後の正確情報等を国民に届けること。そして三つ目、各自治体への技術連携ということ、これをもって感染症サーベイランスを強化、感染症の発生を素早く察知、管理、公開して、健康な暮らしを守るというところでございます。

3ページ目として、展開イメージとしては、このような流行の察知、迅速なものとして、一番大事なところ、医療機関、こういったところを中核とした情報探知の方法を御説明をさせていただいております。特に大事なところとしては、患者さんの診断を迅速にできないかということで、4ページ目から5ページ目、6ページ目のところで御説明をしております。

最後の7ページ目のところでございますが、工程表といたしましては、2020年に向けて、新興・再興感染症に関する新たな迅速診断法等の開発ということ、データベース等をつくることによって情報共有体制の整備とか、医薬品診断技術の開発ということを進めてまいりたいと思っております。

我々の技術、あまり表に出るときというのは感染症が流行しているときですので、あまり良くないんですが、縁の下の力持ちとしてこのオリンピック・パラリンピックに向けて準備を進めたいと考えております。以上です。

#### 【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

次にプロジェクト3につきまして、各省の取組を内閣府より取りまとめて御説明させていただきます。

#### 【内閣府】

資料2 - 3でございます。プロジェクト3の実施計画書につきまして、取組のコンセプトと展開イメージを中心に説明いたします。

まず2ページ目を御覧ください。2枚めくっていただいて、本プロジェクトのコンセプトは高齢者、障害者が健常者と同じように社会参加できることで、多様な人が参加する活気あふれる社会が実現できている姿を、大会を通じて発信するということを目的として、タイトルの的には社会参加アシストシステムとしております。

3ページ目を御覧ください。

この取組で2020年での展開イメージを示しております。三つのシーンを設定しております。

まずシーン1、街の中、それからシーン3の競技観戦の絵にありますように、アシストスーツ等の科学技術を健常者の機能アシストへ活用し、配送業等のサポートや、ちょっと痛いけど動けるような方へのサポートを実現し、大会を通じて一般の方々に技術を発信することで大会後の市場拡大を狙っていく取組や、BMI技術の活用により、コミュニケーションが困難な重度障害者の自立を促進することでさらなる社会参加が実現できていることを社会に発信する取組です。

シーン2、競技支援にあります通り、パラリンピック等の競技、トレーニング向けの機器の要素技術と一般福祉用具の技術との複合適用を促進するための環境整備を行い、大会を活用して技術力を発信し、パラリンピックでのメダル獲得や、より利便性がある福祉用具の開発、利用を目指す取組を書いております。

最後にシーン3、競技観戦にまた戻りますけれども、車椅子を用いた自立行動支援システムを実現し、大会の会場エリアで活用することで、高齢者、障害者の安全・安心な移動を実現する取組であります。このような取組により、年齢や障害の有無に関わらない真摯なバリアフリーを実現するための科学技術をフル活用していきたいと考えております。

4ページ目以降は実現に必要な取組、役割分担を決めておりました、例えば14ページを見開いていただきたいのですが、パラリンピック向けの競技用具と福祉用具の技術の相互適用では、文科省、経産省が中心になって取組を進めるとしております。

16ページ以降には工程表を付けております。以上です。

#### 【内閣府】

内閣府でございます。引き続きましてプロジェクト4を説明させていただきます。

このプロジェクトは表紙にございますように、「Mobility Innovation 2020」というコンセプトで取り組んでいきたいということで、オリンピックを契機として、新しい都市交通システムを実現していくというものでございます。

一枚おめくりいただきまして、タイトルを御覧いただければと思います。このシステムを導入するに当たりましては、社会的な問題ということで高齢化社会等をしっかり見据えた形で取り組んでいくということを想定しております。

更に一枚おめくりいただけますでしょうか。中程に手段ということで書いてございますが、大臣、副知事の御説明にもございましたとおり、最終的な成果展開というのは東京に限っていないということで、地方への展開も考えているといったプロジェクトになっております。

一枚おめくりいただけますでしょうか。それを具体的な図で示したものがこの図になります。東京だけではなくて地方への展開も見据えた形で、取り組んでいるということを図でも示しております。それを文字で記しましたのが次のページ、4ページでございます。これを実現するために取り組むべきことということで四つ柱がございます。一つ重要な柱ということで研究開発がございます。ここで四つほど研究開発のテーマが紹介されているところです。詳しくは御説明しませんが、5ページ目、6ページ目に課題が載せられているところでございます。加えて二つめの柱としては規制制度改革、三つ目ではシステム設計、四つ目では事業運行と、こういった柱についてしっかり取り組んでいるというところでございます。

役割分担でございますが、四つの柱についてそれぞれ関係省庁、あるいは東京都ですとか、民間企業の方、それぞれ入ってもうすでに検討が進んでいる状況でございます。

今後に向けましては、右側でございますとおり東京都様が、実際にその都市交通を運営する主体を公募するといったことも想定している状況でございます。

最後の9ページでございますが、工程表ということで、研究開発につきましては上の段でございますとおり2017年目途で一定の成果をあげ、それを事業に展開していくと想定しています。以上です。

#### 【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

次にプロジェクト5について内閣府よりお願いいたします。

#### 【内閣府】

内閣府でございます。プロジェクト5では水素社会実現への貢献を目指したエネルギーキャリア技術の開発を行ってまいります。

2ページ目を御覧ください。

水素は燃焼しても水しか放出しないので、究極のクリーンなエネルギー源だと言われております。一方、常温では気体で存在しているために取扱が難しく、水素の生産地から消費地まで効率的に輸送、貯蔵するためにはエネルギーキャリア技術の開発が不可欠です。

3ページを御覧ください。本プロジェクトでは左側の水素製造を担う地域では再生可能エネルギー由来のクリーンな水素をエネルギーキャリアに転換する技術の開発を行います。また右側の水素を利用する首都圏ではエネルギーキャリアから水素ステーションへの水素転換技術や、

エネルギーキャリアによる直接発電技術等の開発を行う予定です。

4ページを御覧ください。戦略的イノベーションプログラム（SIP）では、現在有望なエネルギーキャリアと考えられている有機ハイドライドとアンモニアの技術開発を行い、2020年の東京オリンピック・パラリンピック時期に水素関連技術として、そのデモと実証を行う予定です。水素バリューチェーンの中で、図中の赤字で書いてある部分が本プロジェクトで行っている研究に相当いたします。その技術をレガシーとして2030年頃には水素技術の全国展開を図っていきたくと考えております。具体的研究内容に関しましては6ページ目から8ページ目に記述しておりますが、説明は省略させていただきます。

役割分担に関しましては9ページに記載してあります。戦略的イノベーションプログラム（SIP）のエネルギーキャリア課題を中心に研究開発を進めていく予定であります。10ページ目に書いてあるとおり、来年度末、2015年度末に、オリ・パラ時期で実証デモが可能な技術の可能性を見極めて、研究開発項目を集約していく予定でございます。

プロジェクト5に関しては以上です。

【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

次にプロジェクト6について内閣府よりお願いします。

【内閣府】

内閣府でございます。

資料の2 - 6にもとづきましてゲリラ豪雨・竜巻事前予測について御説明させていただきます。

2ページを御覧ください。まず取組の概要です。社会課題として、近年ゲリラ豪雨等の極端気象による災害が激化しているという現状を踏まえまして、豪雨等事前予測によって極端気象にともなう災害から国民の命を守る、これを長期ビジョンといたしまして、現在も戦略的イノベーション創造プログラムのひとつの課題として取り組んでいるところでございます。この取組について、東京大会においては、ゲリラ豪雨等の極端気象にかかる災害情報を正確かつ時間的余裕を持って提供することで、安全な大会運営の実現と来訪者の安全な滞在を確保するというものでございます。

その下に三つの手段がございます。一つは安全・安心な大会姿勢を世界の人々へ強く発信す

るソーシャルインパクト。二つ目は安全・安心ホスピタリティ提供のため、極端気象の予測情報を発信する大会ホスピタリティ。それから三つ目は実証された技術の展開を図るという、シェアードバリューという、この三つの手段で取り組む予定にしております。

それから次のページを御覧ください。3ページに展開イメージを示しています。左側にあるような従来型の気象レーダーに加え、今回から新型の気象レーダー、この右側にありますけれども、組み合わせてゲリラ豪雨の観測精度を向上させるというものです。これに基づいた予測情報を下に囲ってありますが、「競技者や観戦者へ提供する」と。前回もご意見をいただきました、気象の影響を受けやすい屋外競技の中断、再開の判断に貢献したり、観客や競技者の安全を確保するというものに貢献するものです。また、交通機関や治水等の施設管理者等に提供することで、それぞれの活動に利用していただくというものでございます。

4ページ目から7ページ目は具体的な内容、前回も御説明したものを書いてありますので割愛させていただきます。8ページ目を御覧ください。役割分担、事業主体でございます。各課題研究項目につきましてはここにあるような機関で担当していただき、事業主体としては気象データサービス事業者等を想定しております。

最後、10ページでございます。

工程表ですが、最初の3年間で新型レーダー、ハードの開発、それから予測対応技術ソフトの開発をした上で、2017年から2018年で首都圏での実証試験を通じてサービスを展開していきたいというように考えております。以上です。

#### 【事務局（森本統括官）】

ありがとうございました。

次にプロジェクト7について、各府省の取組を内閣府よりまとめて説明させていただきます。

#### 【内閣府】

資料2 - 7でございます。最初の写真のところ、移動最適化システム、ビッグデータで人の流れをスムーズにし、安全で快適なおもてなしを行うことを記載しています。

1ページめくっていただくと、具体的な内容としましてはサイバーフィジカルシステムによる安心安全の実現及び快適なおもてなしの実現としております。

2ページ目を御覧ください。今、御説明したような今回のコンセプトは、ビッグデータで人の流れをスムーズにし、安全で快適なおもてなしをしていくものと考えております。

3 ページ目の展開イメージを御覧ください。

下の左に描かれている空港、駅、商業施設、競技場等のような観戦客が訪れる場所で、防犯カメラや赤外線センサー等によるセンシング情報を適切に匿名化して集積し、仮想空間に構築します。そしてそこで分析を行い、結果を実世界にフィードバックします。こういった枠組みのプラットフォームを構築しまして、いろいろな利用者が参画していくことによって多彩なサービスの実現、高度化をはかっていくというところでございます。具体的なサービス例として右側を御覧ください。例えばシーン1、国際空港や公共交通機関ではシステムがけが人、急病人、不審なものや人、障害者の方を速やかに発見し、スタッフやボランティアの方々を駆けつけさせて、国民や訪日客の方々に安心・安全や快適なおもてなしを提供いたします。また、シーン2では、街の中でのお店の混雑状況のリアルタイムな認識と提供や、シーン3では、会場周辺の混雑状況を認識し、誘導スタッフをリアルタイムに最適配置することによって観戦客に安全と快適さを提供するというものでございます。

10ページ目に工程表、まだ現在想定のものでございますけれども、やはりこういうものにつきましてはプラットフォームの規模を拡大しつつ実証実験を進めて、2018年度末には実運用リハーサルに入ることを目指していこうと考えております。

また、このプロジェクトの実現にはやはりパーソナルデータの利活用に関する環境整備ということが整っていくということが前提となりますので、そちらとも連携しながら進めてまいりたいと考えております。以上です。

**【事務局（森本統括官）】**

ありがとうございました。

次にプロジェクト8について、総務省よりお願いします。

**【総務省】**

総務省でございます。資料2 - 8を御覧ください。

1 ページ目、超臨場感技術の研究開発による新たな映像体験の実現ということで取りまとめさせていただいております。

2 ページ目御覧ください。

日本の映像産業ですけれども、クールジャパンとして様々な国から支持をいただいておりますが、関連産業全体として発展が見込まれる分野として期待されるものでございます。それが

ら、日本発の新たな映像技術を創造することで、国内の関連産業が活性化されるというビジョンを持っております。それから、東京大会におきましてはいっそう大きな驚きと感動を与えることができるんじゃないかということで、日本の技術開発力をPRする絶好の機会かと考えております。

三つの手段というところにまとめておりますが、まず一つめは、世界に先駆けた映像技術やコンテンツを発信していくとしております。二つめですが、イベントや観戦時の演出に活用して大きな驚きや感動を生んでいく。それから三つめといたしまして、感動や興奮を時や場所を越えて誰でも味わえるようにするというところでございまして、コンセプトとしては「新・臨場映像体験システム」ということでまとめております。

3ページ目にこのプロジェクトを構成するいくつかの技術を組み合わせて実現されるイメージをまとめております。シーンとしては競技会場、あるいは街の中を想定していますが、競技会場では立体映像技術であったり、さまざまな方向から見たときにその方向からの映像を見ることができる多視点映像、それから街の中では電子ペーパーにチケットを表示するというような技術だとか、あるいはパブリックビューイング、あるいは右上にございますように、今までにないような観戦方法、こういったものが提案できるのではないかと考えております。

4ページから5ページにかけては具体的な技術ですので省略させていただきます。

6ページ目を御覧いただきますと、やはり実現に必要な取組としましては技術開発に加えまして、いろんな通信技術に関する規格統一ですとか、そういった規格化の部分の議論が必要になってくるかと考えております。

それから7ページ目でございますけれども、役割分担、事業主体ということでもまとめさせていただいておりますが、実はこのプロジェクトに関しましては総務省と経済産業省で議論を重ねてきておりまして、今後は東京都をはじめ、メーカーの方々等にも入って頂いて議論を行う必要があると考えております。

8ページ目に工程表をまとめておりますけれども、2019年には具体的なシステムの実現に向けた検討ができるように取り組んでまいりたいと考えております。

以上です。

【内閣府（森本統括官）】

ありがとうございました。

最後にプロジェクト9について農林水産省よりお願いします。



## 【農林水産省】

農林水産省でございます。

資料2 - 9で御説明申し上げます。

本プロジェクト、前回のタスクフォース以降、タイトルを分かりやすいものにしてはどうかというようなご意見をいただきましたので、まず1ページ目でございますけれども、「夏でも負けない花づくりプロジェクト」と名称を変えました。

2ページ目を御覧ください。長期ビジョン、東京大会での役割等については大きな変更ございませんが、基本理念においても御説明のありました三つの手段についてソーシャルインパクト、大会ホスピタリティ、シェアードバリュー等々について整理しております。2020年に向けたコンセプトといたしましては、「ジャパンフラワープロジェクト」というようなことで「フラワーイノベーション2020」というようなことで整理をしております。

3ページ目を御覧ください。展開イメージでございます。とても良い資料ができたと思っておりますが、大会期間中の演出例として、皆さんが目につくようなものを想定して描いてございます。特にシーンの2で街の中でございますが、花や緑の癒やし効果で選手や来訪者もリラックスというようなことで、前回のタスクフォースで為末構成員からのご意見も取り入れたところでございます。

4ページ目はありがたい姿と具体的な成果イメージでございまして、個別の課題になりますので、今回は御説明を省略いたしたいと思っております。

7ページ目を御覧ください。役割分担、事業主体でございますが、研究開発を27年度からプロジェクトとしてスタートさせることとしております。予算が通り次第、研究を始めていく予定ですが、まもなくこの事業実施主体を公募する準備を進めているところでございます。金額はここに書いてございませんが、27年度におきましては1.1億の概算決定をしております。

8ページ目を御覧ください。工程表が出ておりますけれども、2020年を待つまでもなく成果を前倒していきたいと思っております。先ほど来、1.1億を強調しておりますけれども、小さく産んで大きく育てて、民間企業等も巻き込んで、大きなプロジェクトに仕立て上げたいと考えておりますので、御指導のほうよろしく申し上げます。

以上です。

## 【内閣府（森本統括官）】

ありがとうございました。

以上が9つのプロジェクトの概要でございます。

そして机上のみに配付させていただいておりますが、これらのプロジェクトを全部概算で総合計すると、だいたい数百億円程度という見積りがございます。ただ、国の財政事情も非常に厳しい状況ですので、資金面においても、産業界からの積極的な参加を促していくということが非常に大事ではないかと思っております。

それでは、御説明申し上げましたプロジェクトの取組につきまして、御質問、ご意見等ございましたら、お寄せいただければと思います。

#### 【竹内構成員】

プロジェクト7について、今日ではテロに対する不安感がとても高まっています。本日ここに来る間もいろいろと考えていて、この建物に入るときに事前登録をしてあって、なおかつ身分証明書の提示を求められた時に何を感じたかということ、「安心だな」という思いです。つまり、何かこうセキュリティが沢山あるというのは、煩雑さや嫌な思いとか、あるいは個人情報がそこに取られているような反応が強いと思います。一方でその安心感というものがやはり重要な場合があって、特にこういう大会では安心であるということが担保されていること、こういうシステムによって安心が得られるんだということを周知徹底させると、プライバシーの問題よりも安全を人々は選ぶと思います。その点を一体どのようにして皆さんに理解してもらいつつ、どういうシステムを導入するのかというところを詰めていったほうが良いのではと思います。

#### 【内閣府（森本統括官）】

ありがとうございます。

#### 【為末構成員】

竹内構成員と同じところですが、プロジェクトの と と を一緒にしたらどうかと思います。実は はまだ分からないのですが、 と は比較的同じような、多分感染症という入り口の問題やそのあとの広がりを防ぐのは人の動きに関わるものではないかと思います。多分これも個人情報が関連するのかなと思うのと、もう一つは、ゲリラ豪雨や気象予測等も人の動きと関連してくるような気がするので、何か、人全体のビッグデータのようなものを扱って、どういうふうにやっていくのかについていうことを考えてはどうでしょうか。

もう一つ、この中に入れるのは難しいかもしれませんが、ドローンが多分かなり普及しているはずだと思うので、空中からのものとか、あとはサイバーテロも入ってくると思うんですけど、ちょっとこれとはずれるかもしれないですが、テロ対策と人の動きやセキュリティの取組を、どうせだったら一緒に進めていけると、より強力な対策になるのではないかと思います。

#### 【内閣府（森本統括官）】

便宜的にプロジェクトを分けさせていただいておりますが、プロジェクト間で連携することで、もっとすばらしいことができるかもしれない、そういう御指摘かと思えます。

#### 【ハーラン構成員】

プロジェクト について発言させていただきたいのですが、確かに今、テロ等に対する意識が高まっている中で、みんな心配しているところだと思いますが、日本の治安のよさ、世界的に有名ですし、その中で暮らしている僕はもう毎日のように驚いています。財布が返ってくるとか、落とした携帯が返ってくる。こないだスキー場でカメラを落としたら30分で戻ってきたんですよ。もう、逆に「僕の写真はいらないのか？」と思うぐらい。驚いたんですけど、まあ日本のその治安のよさのいいところは、ある程度監視社会でもあるんですね。隣近所がよく見張ってくれているというのもありますし、でも非常にそういう人間味を失っていないよさもあって、今回のこの提案の中ではちょっと監視社会に走り過ぎという心配もあるんじゃないかなと思います。「あなたは見られていますよ」というふうに、どこにも防犯カメラがあって「あなたのデータを今集めていますよ」というふうに「見られたら損かな」と思うものです。この3ページの図の中には、匿名化というところがありますが、これをもう少し強調してもいいかなと思います。

あと何かあったら画面タッチすると人間が出る、そういう電子交番的なものがあるといいかなと。交番は世界的にも結構注目されている日本の独特なシステムなのですが、人間が出てきて、その顔が見えると安心度がぐっと上がると思います。

#### 【内閣府（森本統括官）】

ありがとうございます。監視社会にならないように、というご意見かと思えます。

## 【齋藤構成員】

プロジェクト に関しては、どこまで外資、海外の会社と手を組むかということになると思いますが、この自動翻訳や自動通訳など、先月ラスベガスのCESでグーグルさんがデモをしているんですよね。プロジェクト的にはInnovation for ALLなのですが、日本社以外もイノベーションに参加して良いのか、日本の会社限定するのかという課題が出てくると思います。このプロジェクトの自動通訳や自動翻訳の技術は結構海外でも進んでいるところなので、大量の税金を使って純国産で完成させるのか検討する必要があると思いました。

プロジェクト ですと、感染症に関しては私もちょっと絡んでいたのですが、アメリカでは9.11のあとに炭疽菌などをセンサーで検知する技術が進んでいます。ちょうど今日スーパーボールがあって、アメリカ西海岸で非常に感染が広まっている「はしか」をどう検知するかという取組が話題になっています。まさにこのプロジェクトに書いてあることがもう実装されて、しかもバージョン4ぐらいに達していますので、ゼロから取り組みを始めるよりは、知見を吸収する、協力したほうが良いのでは、と感じました。

プロジェクト ですが、発電とか送電とか蓄電とか、やはり使い勝手を総体的に考えるべきだと思うんですね。選手村をうまくテストケースにして、そこに日本の電機産業に関わっていただいて、DCパワーを利用していくことに、私は未来の可能性を感じています。ACからDCに毎回変換したり、水力のほうでも発電してどうDCに変換するということところで、変換時で大体数%損をしている。皆さんも使われているACアダプターは、場合によっては7%から20%も損しているんですよね。もちろんDCにはDCの問題がいろいろありますけど、それこそイノベーションを起こしていくべきです。今、駐車場に行くとDCの充電器が設置され始めていますので、それをどうスマートアプライアンスにしていくか。エネルギー問題にも繋がるチャレンジに値する課題だと思います。送電は書かれてはいないのですが、発電だけでなく、送電や蓄電も課題になってきます。

プロジェクト は、公共性が高いですし民間より国としてやったほうが良いと思います。ただ、二次的な影響として気に掛けておいた方が良いのが、これこそビッグデータの話ですが、だんだんデータが蓄積されてくると、ある場所がスコールに見舞われやすいとか、ある場所がヒートアイランド現象で熱いとか定量的に分かってきますよね。変な話、結果土地の価値を下げるようなことに繋がる恐れもあるので、情報の出し方には注意した方が良いと思います。地域の価値等に影響を及ぼすとなると、住んでいる人がかわいそうかなという気もしますし。

### 【ハーラン構成員】

出さないと、そこに引っ越す方がかわいそうですね。

### 【齋藤構成員】

そうですね。それをどうバランスをとって行うかというところを考えないといけないと思いました。

最後にこのプロジェクト ですが、プロジェクションマッピングとか大迫力映像を楽しむという発想はよく分かります。こういう技術を、テンポラリーじゃなくて、パーマメントにそういうディスプレイを設置して、例えば、今100メートル走が東京会場で行われているときに、自分たちが世界一流の選手に対してどのぐらいの早さで走れるのか、ライブで横で一緒に走って体感できるような取組をしてはどうかと思います。オールジャパンなわけですから、特に地方などでそういうディスプレイを色々な所に設置してみてもいいでしょうか。100メートルダッシュがちょうど良い長さだと思いますが、他の色々なオリンピック種目をライブで楽しめるものにしたい。9秒で走るのはなかなか難しいけれど、9秒がどういうものが体感してもらおう。オリンピックが終わったあとは、それをいつでも再生してたくさんの人々が刺激を受けるとか、ぜひ将来に繋がっていくものと考えてほしいなと思いました。

もう一つ、ぜひ3Dグラスやバーチャルのヘッドセット系も忘れないでほしいですね。みんなに見せるのも良いですが、これからはバーチャルエクスペリエンスも盛り上がっていくと思うので、ヘルメット型のアイデアも進めてほしいです。

以上です。

### 【伊藤構成員】

プロジェクト ですが、社会参加型アシストシステム、もちろんアシストしていただく、私も障害者ですから、アシストしていただくということに関しては非常にありがたい。これはもう間違いないのですが、余りアシストするというよりも、やはり、障害者、高齢者から積極的に前に出るということを考えたときに、私、今車椅子に乗っていますが、車椅子の進化も便利からスタイリッシュにいうところで止まっています。あと、義手、義足、義眼など、いろんな道具にしても、便利というところで止まっている部分って多いんですね。そういったところを、ある意味、本来ハンディキャップとなる部分を見せていくと。見せる義足、見せる義手またスタイリッシュな車椅子を使うことによって、皆さんが例えばフェラーリに乗ったり、

いい車乗ったら街に出たくなるよというのと一緒に、どんどん隠すことではなくて、そういった意味で開発をかけることによって、「見て、私の腕、こんなにいい腕が今あるのよ」というようなものの開発こそ、本来のサポートになるのではないかと思います。というのは、メンタリティの部分にも触れてくるとは思いますが、社会に参加する、まずしていこうという気持ちにならない限り、いくら周りから「アシストしますから出ましょよ」といったって、それでは出られるものではないですから、少しその辺りを提案したいなというところ。

あともう一つは、駅とか空港とかに行くと、点字ブロックがあります。実は車椅子にとってはあれほど不便なものではなくて、どこへいくのも誘導されるとあの点字ブロックで私たちの車椅子はまっすぐ走らないという現実があります。したがって、どうして鉄板が何かひいて、微弱の電流が何かを流し、専用の杖を持って、盲目の方が間違いなく今そういう点字ブロック的なものの上を歩いているんだという安心感を持てるように、フラットな状態でそれができるようなものが開発できれば、バリアフリーというか、誰もが便利にというものに近づくのかなという気がします。

【内閣府（森本統括官）】

ご意見ありがとうございます。久間議員どうぞ。

【久間議員】

ありがとうございます。科学技術イノベーションという切り口で見ますと、1964年東京オリンピックでは、新幹線と衛星放送システムを創出し、まさに世界を変えたわけです。大きな驚きとインパクトを世界の人たちに与えたと思います。今回も、それに匹敵するイノベーションを発信しないといけないと思います。9つのテーマはそれぞれ魅力的なテーマですが、例えば水素社会のような全く新しいコンセプトのテーマと、既存の事業や製品の延長線上にあり、そのままでは余り存在感のないテーマの2種類あります。重要なことは、世界の人々に対して、大きな驚きと感動を与えるとともに、世界の人々が豊かさを感じる、あるいは安心・安全を感じる製品にいかにか仕上げていくか、また見せ方をどうするかが重要です。

先ほど、どこにでもカメラがあると監視されているようでプライバシーという点からは不愉快に感じるという話がありましたが、カメラがあるから安全・安心という見せ方ができれば、大きなインパクトを与えることができると思います。どう仕上げるか、どう実装するかが重要だと思います。

【内閣府（森本統括官）】

貴重なご意見いただきまして、ありがとうございました。

本件、一つ一つ御質問にお答えしたいところなのですが、時間の都合がございまして、本日はいただいたご意見を踏まえて各実施計画書に反映、あるいは修正するところ是对応させていただきたいと思っております。

それから今後、この実施計画書を更に磨きをかけまして、これは不断に進化させていくべきものだと思っております。様々なステークホルダーの方々や、一般の国民の方からご意見をいただき、まさにそのスタートラインに立ったというところですので、そういうものを一つつくらせていただいて、それをベースに次のステップに行くという流れで進めさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

それでは議題の3、「大会開催基本計画（案）の概要について」でございます。

現在、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会におきまして大会開催に向けた基本計画等の整理を行っておりますので、その内容、今後の取組について情報提供をいただきたいと思っております。

それでは布村副事務総長からお願いいたします。

【布村副事務総長】

オリンピック・パラリンピック組織委員会副事務総長、布村でございます。資料3を御覧ください。

私も組織委員会は、先月の1月24日でちょうど一周年を迎えたところでございます。オリンピック・パラリンピック大会の成功に向けて大会準備に取り組んでいるところでありますが、次から次へと課題が出ているところでございます。そういった課題の解決に向けては、アスリートの人たち一人一人がその力を最大限に発揮できる環境を作っていくこと、また、御覧いただく観客の人々が感動や興奮を得られることなどが大会運営には大切になってまいります。そのためにはITを初めとする最先端のテクノロジーを大会に活用するということも課題解決につながると考えております。あわせて、日本、東京ならではの大会として、最先端のテクノロジーを活用し、我が国の誇る科学技術・イノベーションの魅力を世界に発信するということも重要な要素になってまいります。

そういった意味では今日のタスクフォースでも御提案いただいておりますプロジェクトのから までを、ぜひ2020年まで、またその1年前にはテストイベントもありますので、早いう

ちに実現いただくことをお願いさせていただきます。

そして、本日はお時間いただきまして、今後の大会準備の出発点となります大会開催基本計画について御説明をさせていただきます。

お手元の資料3の1枚目がその大会開催基本計画を1枚で簡潔に説明させていただいたもので、2枚目以降で概要版をつけてございます。この開催基本計画につきましては、今月2月中には国際オリンピック委員会、国際パラリンピック委員会に提出し、今後はこの基本計画に基づいて、52のファンクショナルエリアごとに個別具体の実施計画を立てて着実に進めていきたいと考えております。まず1枚目を御覧ください。基本計画は、全体で7章構成になってございます。本日はその中でポイントとなるところを説明させていただきます。

第1章は大会ビジョンでございます。大会ビジョンとして、スポーツには世界と未来を変える力がある。1964年の東京大会は日本を大きく変えた。2020年の東京大会は全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承ということを三つの基本コンセプトとし、史上最もイノベーティブで世界にポジティブな改革をもたらす大会とすることを示しております。

また第1章においては、パラリンピックへの取組姿勢ということで、東京は、同一都市で初めて2回目のパラリンピック大会を開催する都市であり、2020年大会では、パラリンピックムーブメントのさらなる発展、活力ある共生社会の実現なども強調をしております。次に第4章を御覧ください。

第4章は、大会を支える機能、ファンクショナルエリアについてでございます。競技、放送サービス、エネルギー、セキュリティ、ドーピング、あるいはテクノロジーというといった大会運営に必要な52のファンクショナルエリアを設置し、それぞれの機能を明確化しております。それぞれのファンクショナルエリアにつきまして、大会ビジョンを踏まえながらミッション、あるいは主要目標、主要業務、役割を記載することとなっております。

第6章を御覧ください。第6章ではアクションとレガシーという章立てとなっております。2020年が大会の開催年でございますけれども、大会の開催後に残る成果、あるいは社会的な影響というものはオリンピックレガシーという言い方がされております。例えば、1964年の東京大会では、先ほどもお話しいただきましたけれども、新幹線あるいは首都高速、通信衛星という形でレガシーが今の社会にも残っています。ロンドン大会ではスポーツの実施率が増えた、あるいはバリアフリー化が促進されたというソフト面でのレガシーが評価されているところでございます。2020年の東京大会におきましても、この大会の開催を通じて、東京のみならず日本や世界全体に対して、さまざまな分野でレガシーを残すことができると考えております。



そのためには、大会の準備の段階から政府、あるいは東京都、そして日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、そして民間企業の方々の御協力をいただいて、具体的な取組を進めていきたいと考えております。そのための前半がアクションという位置づけになっております。ここの中には5本柱を掲げています。一つ目はスポーツ・健康、二つ目はまちづくり・持続可能性、三つ目が文化・教育、四つ目は経済・テクノロジー、そして五つ目には復興・オールジャパン・世界への発信です。それぞれの柱ごとに関係者が組織横断的にレガシーを残すためのアクションをプランニングして実施につなげていきたいと考えております。このタスクフォースの関係で一番近いところでは経済・テクノロジーの柱があります。東京大会を最高水準のテクノロジーのショーケースとさせていただいて、科学技術・イノベーションを世界に発信する場という形ができればと考えています。

今後は、この基本計画を踏まえて、リオ大会後の4年間がまさしく東京の出番ということで、具体的なアクションを今後作りあげていくとともに、あわせて2020年以降のレガシーをアクションプランとひとつにまとめた形で取りまとめ、リオ大会後にそれぞれのプランに基づき具体的な計画、行動につなげていきたいと思っています。その上で、2020年以降のレガシーにつなげていくことができればと考えているところでございます。

以上が、基本計画の概要でございますけれども、このタスクフォースで議論されております科学技術の取組につきましては、東京のみならず我が国、オールジャパンの発展につながるレガシーともなりますし、また、世界中の新しいイノベティブな変革の提案にもつながると思います。組織委員会としてもこの議論に参加をさせていただいて、一緒になって取り組むことができればということをお願いし、また重ねて、その具体的なプロジェクトの実現をお願いさせていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

【内閣府（森本統括官）】

どうもありがとうございました。

大会全体の計画について、ただいま説明がございましたが、もし御質問等ありましたら、いかがでしょうか。

ありがとうございました。

それでは時間の関係もございまして、最後の議題となるその他でございます。

今後の進め方について御相談させていただきたいと思います。本日取りまとめいただきました内容は、先ほど大臣からもお話ございましたとおり、次回の総合科学技術・イノベーション

会議で御報告させていただきたいと考えております。

それから、このタスクフォースについてですが、これまでの3回にわたり活発な御議論をいただき、本当にありがとうございました。今般、一つのスタートラインができあがりましてので、これでもってタスクフォースの活動はいったん区切りとさせていただきまして、これから、その提案を各方面に展開いたしまして、いろいろ情報発信をして、それをフィードバックさせていただき、こういう形にさせていただきたいと考えております。そして、タスクフォースの下にある推進会議において事業実施の具体的な進め方に関する実務を進めさせていただき、皆様にその進捗状況を適宜御報告させていただければと考えております。

今後は、先ほど大会組織委員会のお話にもございましたが、アクションアンドレガシーに各プロジェクトの取組をぜひ提案させていただいて、それをどういうふうに全体として位置づけていくのかということをお相談させていただき、うまく連携をとっていければと考えております。

また本日の内容を、冊子にいたしまして、これを発信の一助とさせていただければと思います。構成員の皆様にも様々な場でこの取組を宣伝していただく、あるいは情報発信していただくこともお願い申しあげたいと思います。引き続きよろしく申し上げます。

本日、司会の不手際で時間が超過いたしました。最後に松本政務官から一言お願いできますでしょうか。

#### 【松本政務官】

皆様方におかれましては本当に、本日、活発な御議論を頂戴いたしましてありがとうございました。心から感謝を申し上げたいと思います。「Innovation for All」ということで、大変素晴らしいお話ではあると同時に、大変難しい、困難なテーマを設定されたわけでありまして、これはこれらのさまざまなプロジェクトを実現することが目的ではなくて、それをしっかりと全ての方にお届けをして、それらを有効に使っていただき、そして今回のオリンピックを成功に終わらせなければならないという、そういうところに私たちの目標があるものと思っております。ぜひこれからも皆様方には御協力をいただき、またお力添えをいただきまして、何とか、これらのプロジェクトをしっかりと成功裏に終わらせていくことが大変重要だと思っておりますので、引き続きましてお力添えを賜りますように心からお願いを申し上げたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

【内閣府（森本統括官）】

どうもありがとうございました。これで第3回のタスクフォースを終了させていただきます。  
ありがとうございました。

- 了 -